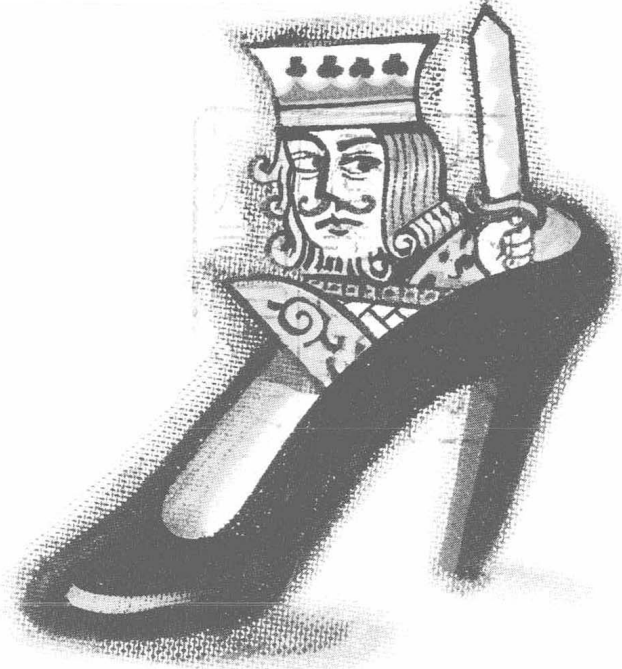




王様の結婚

佐藤正午

集英社

かうさま けつこん
王様の結婚

一九八四年二月二〇日 第一刷発行

定 価 七五〇円

著 者 さとうしょうご
佐藤正午

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇〇―

出版部 (〇三) 二三八―二八四二
電話 販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

製作課 (〇三) 二三八―二九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛
にお送りください。送料は小社負担でお取り替え
いたします。

目次

王様の結婚

5

青い傘

173

装丁 装画
亀海 ネモトヤスオ
昌次

王様の結婚

王様の結婚

西海市青柳町三三―二一というのが女の住所だった。

黒塗りの大型車をターントーブルからほんの七八メートル前進させ、駐車塔の吊り籠のなかへおさめたところで男は思い出した。しかしそれは瞬間に閃いたという感じではなく、まるで、ゆるやかな水紋が徐々に伝って岸でさざ波をたてるのに気づくような思い出し方である。男は気の抜けた吐息を一つつき、これで解決したと思う。この三日ほど悩まされていたものから解放された。これで気にかかることは何もない。少なくともいまのところは……とつけ加えかけて首を横に振った。いま何もないればそれでいい。いままでのことは終ってしまったのだし、これからのことをいま考える必要はない。

男は車を降りる。座席の下に靴裏を合せて置いていたスニーカーを履く。車内に敷きつめられた絨毯を汚すわけにはいかない。キイはつけたままにしてドアを閉じた。駐車塔を出て入口の脇の壁に並んだボタンの一つを押すと、機械が重い唸り声を発して回り始める。淡いグリーンで塗装された鋼鉄の吊り籠が一度きしむような音をたてて身震いし、モーターの力でゆっくり持ちあがり、車を載せたまま塔の上方へと消えていく。塔の高さは約20メートル。代りに同じ色の同じ型の空いた吊り籠がいちばん下の所定の位置に降りてくる。ちようど遊園地の観覧車のような構造で、塔の内部には32台分の駐車用の籠が収容されている。

いつものように、その行程の途中までを確認するともなく眼のはしにとらえて男が事務所に戻ろうとすると、大がかりな機械仕掛けに見とれていた客が声をかけた。

「この駐車場は何時まで開いてる？」

「十一時半まで」

と男は習慣的に答える。実際は十二時までの営業なのだが、残りの三十分は売り上げの計算や事務所の後片付け、それから戸閉りに使う。十二時というのはだから、自分の仕事がつべて終了する時刻だと男は考えている。相手は腕時計に眼を走らせてからもういちど

訊ねた。

「朝まで置いとくといくらになる？」

「十時までなら千円に」

「明日の朝は何時から？」

「八時」

すると黒っぽい背広の上下に黒縁の眼鏡をかけた中年の客は、二三度うなずきながら、「わかった。じゃあよろしく頼む」

と右の掌を上げて背中を向けると、夜の街へ歩きだした。その後姿を見送って、男は二基ある駐車塔の間の壁に据え付けられたまろい時計をながめた。日曜日の十一時。おそらくあの客が今夜は最後になるだろう。

男は透明なガラス張りの事務所に入った。二脚ある折り畳み式椅子の一つに腰かける。

朝の八時から夕方四時までが早番、四時から十二時までが遅番で、その間に午前十一時から午後七時までアルバイトの女の子がいるのだが、この時刻はいつも男は独りである。三年前からこの仕事を始め、最近の半年間はずっと遅番をつづけている。夕方四時出勤の十二時あがり、月四回の休暇（ただし月四回は朝八時から夜中の十二時まで通しで働く）、

月給はその月の売り上げによって十五万から十七万。男はこの仕事に気が入っていた。二基の駐車塔は電動式で、ボタンを押しさえすればそれで一つの行程は自動的に完了する。タイムレコーダーが組み込まれたレジスターも同様で、これも数字のキイ（車種、ナンバー、塔別、吊り籠の番号）を間違わずに叩くだけでよい。客は無言で車を降り、男は無言で複写された半券を渡す。一時間後に半券を持った客が現われ、男はレジを叩き金額を告げる。無言で支払われた百二十円を男は無言で受け取りレシートを渡す。車を入れた時と逆の要領で出す。駐車塔の入口まで降りてきた吊り籠からリバースギアで車をターンテーブルの上まで運ぶ。ターンテーブルの作動ボタンを押す。車の方向が変って、客が乗り込む。その頃にはすでに男は事務所に戻って椅子に腰かけている。女の子が置いていった雑誌を開いていることもあるし、黙って腕組をしていることもある。車が走り出す。男はテールランプを眼で追おうともしない。そういうことが多い。無言の客と無言の応対。夜の駐車場を蛍光灯の青白さが影なく照らし、汚れたコンクリートを殺風景な事務所のなかをそしてターンテーブルに載った無人の車のボディを冷たく光らせる。聞こえる音といえば大通りを流れる自動車の気配だけだ。客は早く通りへ出て流れのなかに入りこみたいと願っている。男は経営者の指示を無視して、アルバイトの女の子が帰った七時過ぎからは、

軽音楽を流す有線放送のスイッチも切った。言葉のある歌は（全体としてはたわいない内容であるにもかかわらず）一つ一つの語句に偶然の毒があり、言葉のない音さえもときに、男の耳にひそむ記憶を不意打ちすることがあった。男は眠った記憶を揺さぶる可能性のあるものは避けるようにしていた。なかば無意識に、そしてなかばは意識的に。つまり男はそれほど自分が過去の記憶に対して臆病になっていることを知っている。いままでのことは終ってしまったわけでは、まだないのかもしれない。静まりかえった夜の駐車場で、青白い光を反射するガラスの箱のなかで男は独りすわっている。これ以上、考えない方がいい。聞かない方が、見ない方がいい、思い出すきっかけになるものは青柳町三三―二一避けなければならぬ。

男はもういちど、さっきよりも深い吐息をついた。夜の駐車場を訪れる客たちが、こちらからうまく話しかけさえすれば、人なつこい笑顔を見せ忘れていた言葉をとりもどすことも男は知っていた。客は本当は喋りたがっているのかもしれない。たとえさっきの男のように、二言でも三言でもいい、それほど意味のない会話でもいい、相手の声を欲しがっている。しかし人は一日のうちで、喋るきっかけを、他人と交す最初の言葉を思い出せない場所と時刻がある。なにも聞こえない。青白い光のほかはなにも見えない。人はなに

も考えず、すでに終ってしまった過去もまだ始まらぬ未来もない。いま訪れいま支払いま去っていく。それがここだった。十一時半。男は立ちあがり、後片付けにかかる。

*

煙草をつけたところで男はレモンいろの車が止っているのに気がついた。遠い街灯の光をうけて、どこか甘い菓子でこしらえた玩具のように薄暗がりのなかに浮きあがって見える。クラクションを鳴らして呼ばれるより先に、男は歩み寄った。運転席側の窓から女が妙に明るい声をあげた。

「ごめんなさい」

「……………」

「ごめんなさい」

と女がくりかえす。謝るというよりも男の返す言葉を執拗に要求する口調だった。

「終るのは七時に終わったのよ。でも、そのあとお友だちと食事をして、それから」

女は喋りながら、男の表情を確かめようと身をひねり、首を曲げるのだが、見えるのは

相手の背中だけである。男の眼に大通りをすぎる赤いランプのつながりが映る。女は窓越しに腕をのばして、男の頼りない指先から煙草をつまみ取ると、

「乗って。乗ってよ、はやく」

それから一口喫い、灰皿にねじり消した。男はレモンいろの車体のうしろをゆっくり回りながら、ナンバープレートに眼をやる。国産55・㌧・33-21やはり間違いない。あの女の住所はこれで解決がついた 青柳町 これでもう気にかけることはない 三三—二一だった。

「どっちへ行くの？」

隣の席についた男を横眼で見て、女が訊く。

「……………」

「ねえ、……怒ってるの？」

「君のとこへ行こう」

と男が言った。薄闇のなかでその表情を女がめざとくとらえて、

「なによ。なにがおかしいのよ」

「君がこの車を買ったのはいつだった」

「去年の秋……もう、また君っていう」

君のアパートへ行こう、と男はもういちど言った。女は大げさに鼻を鳴らしてチェンジ・レバーを扱う。急な発進にタイヤが悲鳴をあげた。しかし男は、女の乱暴な運転を気にとめず、たったいま解決がついたはずの問題をふたたび考えはじめた。去年の秋から今日まで、一年ものあいだこの車に乗っていながらおれは気がつかなかった。三三―二一というあの女の番地。33-21というこの車の番号。三日まえあそこで坂本に会わなければ、封筒の宛名書に何度も書いたことのある漢数字と、一年のうちに何度も眼にしたはずのアラビア数字は結びつかなかった。記憶とはそういうものだ。ほんのわずかな刺激で眠りから覚めて頭をもたげる。眼をこすり耳をすまし、次の刺激を待つ。しかしおれはこれ以上の刺激をくいとめる。あの女の番地が頭によみがえるまで三日かかった。二つの数字の暗合を認めるまで七十二時間が必要だった。おれは刺激の針の先を時間をかけてまわくした。あの女の番地はもうおれの記憶を刺激しない。あの女の何もうこれ以上おれの記憶を揺すぶらない。おれは見えないことで、聞かないことで、そして書かないことで記憶を長い眠りにつけたままにする。それができる。三年かかった。

（知ってる？ ジョン・レノンが死んだわよ）